

淨土

1992-1

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 每月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
平成三年十二月二十五日印刷 平成四年一月一日発行
第五十八卷

正月号



壬申正月

林



正月の秀句

初日拝す古稀の目がしらうるみけり

高橋 青湖

初夢に父に遭ひしが叱られし

佐野 良太

初便り皆生きてゐてくれしかな

石塚 友二

正月号



極楽は五逆のもの念仏によりて生る。況や十悪に於ては、さわりとなるべからず。

——『念仏大意』

目次

＝新春随想＝

正月の法話・三題……………竹 中 信 常……(2)

申年史談……………細 田 隆 善……(10)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話)〔9〕仏正月 ……………(9)

季語やぶにらみ (19)

……………木 下 隆 一 ……(22)

ススキ考(2)

表紙絵 小林治郎画

(新)
(春)
(随)
(想)

正月の法話・三題



たけ なか しん じょう
竹 中 信 常
(浄土宗総合研究所長・文博)

お答えになった。

「まことにはのむべくもなければ、この世のならい」

本当は飲むべきではないが、世間でみんなが飲んでいるのだから、少しぐらい

一
酒好きの人が法然上人にうかがった。
「酒のむは罪にて候や」

はいいでしょうという意味である。

佛教では「葷酒山門くんしゅに入るを許さず」

といつて、葷つまり臭いある野菜（ネギ・ニラ・ニンニクなど）や酒は寺に持ちこんではいけない。いわんやこれらのものを食べたり、飲んだりすることは禁止していた。

していけないといわれるとよけいしてみたくなるのが人情である。「葷酒許さずとして、山内に入る」と読みかえて、坊さんも酒を飲んでユデダコのようになったりする。

ところで、法然上人の開かれた浄土宗では、余りむずかしいことはいわない。ただ、すなおな心で阿弥陀佛を信じて、一生懸命に念佛を唱えれば、どんな悪人

でも極楽浄土に往生することができると教えている。飲みたいのを我慢し、そのことが気になって、念佛を唱えることをおろそかにするよりは、みんなが飲んでゐるのだから、念佛の邪魔にならぬ程度に飲んで、心のこだわりをなくして念佛を唱えなさいというのである。

「お念佛をしているうちに眠くなった
らどうしたらいいでしょう」
と問われて、

「ねむい時にはねなさい。そして目が
さめたら、また念佛を唱えなさい」

とおっしゃっている。法然上人ご自身は、いつも佛教のいましめを厳格にお守りになったが、一般の人々にはむずかしいことをせよとはおっしゃらなかった。五

逆・十悪といった大罪を犯したもので、臨終一声の念佛を唱えれば往生できるのだから、悪いことをせずに念佛を唱えさえすれば必ず佛さまは助けて下さるのだと教えて下さった。

正月は酒飲みの天下である。元旦の朝からのお屠蘇から始まって、松の内がすんでも、仲間と集まって「新年会」と称して酒を飲む、しかし法然上人のいわれるように、「世のならい」程度にしておきたいものである。

二

今年もまた「成人式」を迎える若人たちの日がくる。それぞれに晴着を着て、

式典に参列し、思い思いに友人知人と語り合い、訪れ合つてすごす一日は、若き日の思い出として長く心に残るだろう。人間は一生の間、何度か、人生の節目を通じて成育する。誕生から始まって、お七夜、宮詣り、おくいぞめ、七五三などなどの行事をくぐって、終着駅に至るのであるが、その中でも成人式は、「結婚式」について大切であり、華やかなものである。

成人式とは「人となる」ことである。一人前の人間となるのである。一人前になることはあらゆる意味で一個の人格を持つ「ひと」となることである。かつて軍国主義華やかなりし頃は、すべてのことは「徴兵検査」がメドとされた。それ

までは酒もタバコも許されなかった。すべては検査がすんだか、まだすまないかできめられていた。もっと昔、徳川時代には十五歳が「元服」であつた。それまでは幼名だつたのが、ちゃんとした名前を名のり、着物もそれまでは筒袖つとそでだつたのが、袂たもとの着物となり、武士の子は袴はかまをはくようになる。女子にも「腰巻祝い」という同じような行事があつた。そして、氏神社には一人前の「氏子」として登録されたものである。つまり子供から大人に生まれ変わったことになる。

このことをリアルに表現した儀式が、未開人の間におこなわれる。例えばニュー・ギニアのパプの一部族では、少年たちが一定の年齢になると、それまで

の部落での生活を離れて、一般の人の近づけない小舎にうつされ、そこで一定期間はげいしい訓練やしきたりや部族の秘儀が教えられる。小舎全体は一種の怪物とみなされ、入口にはおそろしい像が飾りつけられている。つまり少年たちは怪物に呑み込まれ、その胎内でいろいろの試練を受けるのである。そしてそれが済むと、再び怪物の口から一人ずつ出てくる。その時は丁度生まれたばかりの赤ん坊のように地面を這つて出てきて、コトバも幼児のような音声を発する。それは少年たちが少年として死んで、成人となつて生まれて来たことを象徴しているのである。こうして、昨日の少年は死んで、新しい人間となつて、一人前の部落民とな

るのである。

人間はこうして一生の間、何回か変身して行くのである。結婚式で花嫁が白無垢から打かけになり、ふり袖に衣裳がえするの、少女から一人前の女性へと変わって行く姿をあらわしているのである。宗教の世界でも変身がおこなわれる。宗教の場合は変身ではなく「変心」というべきであろうか。とに角それまでの人格から脱け出して「宗教的」人格に生まれ変わるのである。キリスト教では「回心」と呼んでいるし、イエス・キリストが三十歳で予言者ヨハネの洗礼によって回心したことは有名である。釈尊は三十五歳の時、坐禅瞑想によって「悟り」を開かれたのも、一種の回心、さらには変

心といえよう。こうして偉大な宗教者はそれぞれはげしい修行を経て「自己変革」をして、新しい信仰の世界を開いたのである。浄土宗の開祖法然上人は四十三歳の時、それまでの教えを捨て去って、新しい念佛信仰に入られ、有名な「選択集念佛集」を著わされたのである。つまり、それまでのむずかしい佛道修行をふり捨てて、ただ、阿弥陀佛の本願である念佛を唱えさえすれば、どのような者も救われる道を選び取ったのである。念佛以外のことは往生のためには不用であるというのである。かつて、「智慧第一の法然房」といわれ、当時の佛教界では第一の智者だった法然上人が浄土宗を開かれてからは、ご自分のことを「十悪の

法然房、愚痴の法然房」といわれ、それまでの智慧・学問をかなぐり捨てて「赤子」のように純粋な心で念佛にはげまれたのである。

「上人常の仰せには、源空（法然上人）は智徳もて人を化するもなお不足なり。法性寺の空阿弥陀佛（人名）は愚痴なれども、念佛の大先達としてあまねく化導ひろし、我もし人身をうけなければ大愚痴の身を受け、念佛勸行の人とならん」

私は今まで、知識や智慧によつて人を教え導いてきたが、それでは不充分である。法性寺の空阿弥陀佛という人は愚かではあるが、念佛信仰の大先輩として多くの人々を教え導いている。私がもし次

の世に人間に生まれたなら、空阿弥陀佛のように、何を知らずともただ念佛にはげんで、多くの人を教え導きたいものである。法然上人は、四十三歳の時、本当に宗教的に「成人」されたのである。

三

今月の二十五日、法然上人は八十歳で亡くなられた。流罪を許されて、前年の暮、やつと京都東山の旧居にお帰りになつたが、長い流罪生活と老齡のため正月二日より病床に臥せられるようになった。しかし、床上にあつても念佛だけは片時も休みなく唱えられていた。病勢が進み、二十日には房舎の上に紫雲が棚引

き、上人は空中の一点をじっと見つめられていたので、弟子たちがたずねると「佛さまがおいでになった」と答えられた。

それ以後、上人は時に高声にて念佛を唱えられていたが、弟子の勢観房源智が、お形見のしるしに念佛の教えの肝要をお残し下さいとたのむと、床上に筆紙を求められ、一枚の半紙にサラサラと書き下された。これが浄土宗のものが朝に夕にお唱えする「一枚起請文」であった。

二十五日の午（ひる）の刻より念佛のお声がかすかとなり、時々、高い声で念佛され、慈覺大師の賜った九条の袈裟をかけ、頭を北に、顔を面にむけ、「光明遍照、十方世界、念佛衆生、撰取不捨」とお唱えになったのち、ねぶるが如くに

して息絶えられた。息絶えたのちもなお、十返ほど唇を動かされた。建暦二年（一三一三年）正月二十五日、「日午の正中なり」ということであつた。

正月の三日、弟子の一人が、このたびはご往生なさるのですかと問うたところ、

「われもと極楽にありし身なれば、さだんでかえりゆくべし」

とお答えになつてゐる。法然上人は極楽からわれわれを教え導くためにこの世に生まれられたのだから、この世が終れば、当然もといふ極楽に帰られたのである。ありがたいことである。

仏 正 月

勝 崎 裕 彦

正月元日を中心とした大正月(男正月)の新年行事に対して、正月十五日を中心として営まれた小正月(女正月)の行事も、地方色豊かなゆかしい行事として伝えられていた。

仏正月も、小正月を過ぎた正月十六日頃に行なわれてきた行事で、新年になってはじめて寺参り、墓参りをし、あるいは仏壇に正月のあれこれの供養の品々を供え、あらためて仏をお祀りする仏事のはじめの儀式であった。

もちろん、各地方によっては正月四日とか十八日とか二十日とか、営まれた日^ひ日もさまざま

まであり、お盆と並んで伝統的な魂祭行事として伝えられてきたものである。俳諧では、仏の正月、仏の日、仏の口明^{くちあけ}、先祖正月、寺年始などという季語となっている。

ひとり来て仏の正月崖荒し(鬼彦)

ところで念仏の口明とか鉦起し、鉦始めなどといわれるのも、仏正月と同じ意味で、一年最初の念仏はじめの行事である。小正月を済んだ頃の心の習俗として、百万遍の数珠を繰りながら、老若男女がこぞって念仏を唱えたものである。時の流れと共に、習俗も一新し、仏正月といった言葉も次第に聞かれなくなってしまうが、私の念仏の口明は、精一杯の声を出し、心を込めて鉦の音に託したい。

一線を画して唱う鉦始め(裕彦)

申年史談



平成四年は、干支えとの上から壬申みずのえさるにあたるので申年さるどしといい、十二支にあてると動物の猿の年である。申は時間の上では午後四時をい、また午後三時から五時までの二時間をい

細田隆善
ほそ だ りゅう ぜん

う。申は方角の上から西南西をいう。本年は西暦一九九二年、仏誕暦では二五五八年である。昭和以来六十七年、大正以来八十一年、明治以来百二十四年あと八年で二十一世紀で

ある。申年は申々のびのびと和らぐ年である。

猿は哺乳靈長目に属し人間にもっとも近い

高等な動物である。猿は欧州、豪州、北米を除いて世界の温熱帯各地に生息し、種類もきわめて多い。石器時代縄文土器の貝塚の中から猿の骨がでてゐるのは、当時猿の肉を食用にし、その皮を利用し、黒焼にして薬用にした。古墳時代の埴輪土偶に牛、馬、犬、猪とともに猿の土偶が出土してゐるのは猿が人に飼われたこともあるからだ。

日本の猿は、かえん、ましら、えて等の別名がある。猿は賢い動物であるところから、和訓の栞には智のまさりたることから和名さるの語ができたという。

古事記と日本書紀の神話に猿の話はない。
猿田彦命がでてゐるがこれは人名である。

奈良時代の常陸国風土記にはじめて猿の住んでゐたことが記るされている。和名抄に「猿、音は園（えん）、字は猿に作る。和名は佐流」とあり、また八雲御抄に「猿、ましら、ましこ、まし」と猿の別名が記されている。古歌には猿は取材されていない。万葉集に猿の歌はつぎの一首だけである。卷三大宰師、大伴卿、酒を讀ざる歌十三首の一。

○あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見
ば猿にかも似る

賢しこそうにしても酒を飲まない人は猿
のようだとの意味である。

古今集にも猿の歌はつぎの二首であつて、
古来猿は歌に詠まれなかった。

○わびしらのましらはなきそ足引の山のかひ
あるけふにやはあらぬ

○空清く有明の月はかげすみで木高き杉にま
しら啼くなり

申の文字は象形文字であって、背筋を伸ば
して直立している姿から出来た文字である。



—古墳時代の猿の埴輪（茨城県玉造町出土）—

猿は象形文字ではない。音からの合成文字である。欧州には猿はいなかったので、ギリシア、ローマの人たちはアフリカから猿を輸入して飼育した。エジプトではマントヒヒを聖獣としてあがめた。日本では猿が人に似ていることから神聖視され、日吉神社では猿は神使とされ、山の神の神使として尊重されてきた。そのため猿を殺すこと忌み、さるという言葉も忌み、狢師は、猿を、やますひと、よもの、よば、はかもの、などといった。

信州上伊那郡長谷村の伊那里小学校の校庭に孝行猿の碑がある。アララギの歌人で芸大出身の彫刻家、藤沢古実の歌碑のレリーフである。その一首。

○息たえし親を生かさんとかわるがわるきず
あたたむる三匹の子猿

六月十五日
山王祭



——猿が神使いの山王祭り(千代田区日枝神社)——

この村の獵師が大雪の帰り道、大猿を討ちとり、明日は皮を剥はがそうと凍こりつかないように囲炉裏の火を埋めて吊した。夜更けに火影がちらつくので、よく見ると子猿が三匹、一匹づつかわるがわる火で手をあぶり、親猿の鉄砲傷をあたためていた。獵師はこの哀れな子猿の光景に感銘し、翌日、念仏の行者となつて、諸国行脚の旅に出たという。この話によつて孝行猿の歌を数多作られたものである。

古代から現代まで猿を神聖視しているのはインドである。インド古代叙事詩ラーマヤーナに聖猿ハヌマットが活躍する。ラーマ王子の妃シーターが悪魔ラーバーナに捕えられたのをハヌマットが悪魔を退治してシーターを取り戻すのである。この説話は演劇となつて現在もひろく続けられていて東南アジア各地

に伝承されている。中国宗代にできた西遊記さいゆうきにも影響している。

仏典ジャータカ物語に猿の説話が多い。その一つ。川にワニ夫婦が住んでいたが妻が病気になる、猿の心臓がよくきくというのでこれを手に入れようとした。岸边に猿を見つけたワニは対岸においしい果物がたくさんあるから連れていこうと誘う。猿はよろこんでワニの背に乗ったが、川の中ほどで、ワニは妻が病気で猿の心臓を食べさせたいためだまして連れて来たことを話した。すると猿はその心臓はもとの川岸の木に吊してきたから、川岸に返してくれたらすぐ心臓をとってくると約束した。猿は岸に近づくとワニの背からとび移つて逃げたという説話である。

庚申こうしん塔はどこでもよく見かける。庚申と文

字だけの碑、青面金剛しょうめんこんこうを刻した碑、その下

部に見ざる、聞かざる、言わざるの三猿を刻したものの、また三猿だけの碑などいろいろあるが、昔、庚申講がさかんであったことからである。開発の進んだ江東区にまだ庚申塔は二十九基現存している。庚申信仰は中国の道教きょうぎょうに由来し、奈良時代に伝来し、これに仏



——三猿（見ざる、聞かざる、言わざる）の碑

（江東区宮岡八幡宮）

教信仰が加わったものである。昔は庚申の碑に集まって食事、飲酒、雑談などをして一夜



——インドネシア・ボロブドールの遺跡

三猿の彫刻がある——

を明かしたものである。人間の体内にいる三尸さんしという靈物が、庚申の体内から抜け出し天帝てんたいにその罪状を報告する。これによってその人の寿命が決定するので、一夜を眠らないで三尸の抜け出すのを防ぐことが庚申行事となり、江戸時代とくに盛んになった。仏教の青面金剛は悪魔を除き、体内の伝尸でんしという死病を除くことから広く信仰され、道教の三尸と仏教の伝尸とが一体視されて、さかんに信仰されてきた。さらに三猿は孔子の不見、不聞、不言の三つの「ざる」が猿に通ずることから、目、耳、口のそれぞれをふさぎ、三猿のことわざとなった。三猿は人の短所を見ない、人の非を聞かない、人の過失を言わないという戒めの格言である。また正しいものをよく見て、善い話をよく聞き、人のため世のために

なることをよく発言することでもある。この三猿思想は中国のみならず、東南アジア各地に伝播している。カンボジアのアンコールワット、インドネシアのボロブドールの遺跡に三猿の彫刻が現存している。三猿思想は古代インドの倫理思想に由来するものである。

猿に芸を教えて舞いをさせたり、芸をさせたることを猿曳さるひきといい、猿引き、猿回し、猿遣い、猿飼さるかいともいい、厩で舞わせると馬の病気を除くといわれる中国の思想に由来する。

吾妻鏡に寛元三年（一二四四）四月二十一日、足利義氏あしかがよしうぢが美作みまさか国（岡山県）から猿の舞いのできるのを鎌倉將軍に献上したとある。和漢三才図会では、紀州の岸甚兵衛が猿引きの始めという。京都の猿引きは毎年正月五日内裏に行き、猿を舞わせたが、平素は京の町を

回っていた。

江戸の猿引きは年の暮れから初春にかけて江戸の町内を回り米銭を受けた。天正十八年（一五九〇）徳川家康が江戸に入ったとき、その乗馬が病気になり、猿引きをさし向け祈禱したところ馬の病気が平癒した。このため



—猿回し（鈴木春信画）—

毎年正月十一日、江戸城馬屋へ猿引きをつれていくことが例となった。全国でも毎年正月馬屋の祭りをし、猿を舞わせ馬の悪疫災害を除くことが例となった。また猿が馬や牛を引く絵馬札を貼る行事が例となった。また江戸市中の猿引きが、浅草奥山において猿の芝居を見せたのが猿芝居の初めであった。

猿芝居は大道芸の一種であり、猿に芸を仕込んで芝居を見せる見せ物である。猿に歌舞伎の衣装やかつらをつけて、歌舞伎役者のまねや所作をさせ、三味線や太鼓に合わせて演技を見せるものである。主演が猿であることに人気があった。猿芝居の主な芝居は、三番雙、お軽勘平道行、山崎街道、一の谷の組討、道成寺、石童丸などであったが、猿が演ずるところが評判であった。猿が犬と共演する芝

居を犬芝居と称した。

猿回しを題材とした狂言、常盤津にうつぼざるがあり、長唄に外記猿などがある。歌舞伎狂言の世話物に、近松徳三作の「猿曳門出諷（さるまわしかどでのひとふし）」が有名、寛政十年（一七九八）大阪の初演である。そのあ



——猿親子（部分、雪舟画（伝））——

ら筋は、井筒屋伝兵衛が恩人のために鷹の一軸を探していた。その一軸は亀山の武士、横淵官左衛門の手にあり、その官左衛門が伝兵衛の恋人である遊女お俊に横恋慕していた。伝兵衛の許嫁おみつの兄の滝口左内の尽力で、その一軸は伝兵衛の手に入った。しかし四条河原で官左衛門と争ううちにその一軸が裂かれたことから、伝兵衛は官左衛門を殺してしまった。遊女お俊は堀川に住む兄の猿回し与次郎の家へ、伝兵衛とともに身を寄せた。お俊と伝兵衛との真情を知った与次郎は、商売の猿を回して二人の門出を祝った。聖護院の森で心中しようとしたお俊と伝兵衛を追っかけてきた人々によって救われ、引き裂かれた一軸が偽物であったことが判明し、めでたしめでたしの大団円であった。この芝居は明

治時代までよく上演され、猿回しが出現することに評判が高まった。

猿回しは、正月の句として芭蕉の句がある。

○年どしか猿に着せたる猿の面めん 芭蕉

この句は芭蕉没年の前年、元禄六年（一六九三）の作である。古い年が去って新しい年が来て、年々過ぎ去っていく。正月に猿回しが猿に面をつけさせて猿に舞わせているが、どんな面をつけも猿は猿であるように人は同じことを繰り返しているにすぎないという意味である。この句だけ「元旦」と前書きがしてあるのは、当時直接季語のないことが問題になったからである。しかしのちには猿回しは正月の季語となっている。

○猿舞や餅いただきて子にくれる 一茶

芭蕉は、延宝八年（一六八〇）から没する元

禄七年（一六九四）まで深川芭蕉庵を本拠とし活躍したが、芭蕉庵の近くに猿子橋があり、猿さる蓑みという句集が刊行され、猿とのゆかりが多い。猿蓑は元禄四年（一六九一）刊行され、蕉風円熟期を代表する撰集で、俳諧七部集の一つである。書名は芭蕉の発句に由来する。

○初しぐれ猿も小蓑こみのをほしげ也 芭蕉

元禄二年（一六八九）初冬、伊賀の故郷に帰るときの句で、初しぐれが季語、猿も人間のように笠が欲しそうだという句意である。

芭蕉の句で猿引のつぎの句がある。元禄年間の作である。

○猿引は猿の小袖をきぬた哉 芭蕉

秋も深まると夜寒のこと、家々から砧きぬたを打つ音が聞こえてくると、猿引きも砧を打つて猿の着物を用意してやるとの句意である。

百人一首の中に三十六歌仙の一人、猿丸大
夫さるまるたの歌がある。

○奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声きく時ぞ秋
はかなしき 猿丸大夫

この歌は深い山の中で紅葉を踏んでゆくと
鳴く鹿の声が聞えて、秋のさみしさが身にし
みて悲哀を感じるといふ歌意である。百人一
首の作者は全て明らかであるのに猿丸大夫だ
けは生没不詳である。三十六歌仙の一人とさ
れているが、三十六歌仙にも不詳とあり、
猿丸大夫集一卷もあるが、万葉集などの読み
人しらずの歌であつて、大夫の歌と確認され
るものはない。しかし古今集時代には実在の
歌人とされていた。歌人としてよりも広く伝
説化されて知られている。その昔、有宇中将
が勅勘ちようかんを受けて、奥州小野郷の朝日長者の

客となつていた。長者の娘を妻とし、一子を
もうけ馬王まわうと称した。馬王長じて待女に一子
を生ませたが、容貌見苦しく猿に似ているこ
とから猿麻呂と名づけた。有宇中将とその妻
は死んで二荒山の神となり、男体権現、女体
権現とつた。山の湖をめぐる赤城の神との
争いとなり、二荒の神は大蛇となり、赤城の
神は**大百足**ひかたとなつて戦つた。二荒の神は敗色
濃くなり、鹿島の神の助言をいれて、弓の名
手の猿麻呂の助けをうけた。猿麻呂は**大百足**
を討ちとり利根川から引き返した。血が流れ
て赤くなつたので赤沼、赤くなつた山を赤木
(城)山、麓の温泉を赤比叢湯といい、敵を
討つた場所を宇都宮と称するようになった。
猿麻呂はのちに宇都宮大明神と崇められた。
猿麻呂は猿丸大夫であつたと伝える。

◎ “維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金三万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

季語やぶにらみ(五)

ススキ考(二)

霧ヶ峰でグライダーの訓練が始まったのは昭和七年からだという。戦時中の滑空機乗りにとって、霧ヶ峰は聖地であった。霧ヶ峰の空を飛ばなければ、一人前の滑空機乗りとして認めて貰えないような風潮さえあった。昭



木きの

下した

隆りゅう

一いち

(隨筆家)

和二十年の終戦間際、愛媛県松山市東郊の見奈良という山間のゴルフ場の跡地で、初歩訓練を受けた中学二年生の私には、地図でその場所を確認するだけで、乗車券の入手難や列車の混雑等を思えば、霧ヶ峰は気が遠くなる

ほど遠いところだった。だからこそ聖地だったと言えなくもないが、その聖地へ十年ほど前の秋、ひよんなことから私は足を踏み入れることになった。蓼科の知人の別荘に招かれた帰り道、立ち寄った蕎麦屋で得た情報を基に、ドライバーの娘を督励して霧ヶ峰へ向かわせたのである。

「今もグライダーの訓練やっていますか」

「ええ。今日はお天気がいいから飛でると思いますよ」

私が店の人とこんなやりとりをしたことを知らぬ娘は怪訝な顔をした。

「なんで、今頃からわざわざ霧ヶ峰なんかへ行くの？ 日が暮れちゃうわよ」

「いいから行け！」

有無は言わせなかった。少年の日から憧れ

続けた聖地のすぐそばまで来ていながら、もし今日行かなければ、生涯悔いを残すことになるに違いないと思ったのである。

話ではなだらかな高原だと聞いていたが、実際には相当の高低差があり、車山の裾野を形成する草原であった。そして一旋の吹き流しがグライダー場の位置を示していた。近づく、と、四、五百メートルのやや下降気味の滑走路と、事務所兼物置といったブレハブの小屋があるだけの殺風景なところであった。一機繋留されている単座の中級機はドイツ製だったが、戦時中に購入したものか機体はかなり草臥れていた。主翼に張られたキャンバスの、塗料のはげた箇所を指でなぞってその感触を懐かしんでいると、目の前の滑走路に白い機体が音もなく滑り込んで来て着地した。降り

て来た中年の操縦士に、

「気分いいでしょうねえ」

と声をかけると、

「最高ですよ。風の具合はいいし、一面にスキの穂が揺れていて、銀世界の上を飛んでいるような錯覚を覚える……」

と、満足そうに深呼吸をして見せた。

（一面の銀世界か）

そう聞かされるまで、グライダーにばかり気をとられていて、広大な眺望は眼中になかった。しかし、改めて辺りの景色に目を転じると、見渡すかぎりのスキの原を風が過ぎるたびに、白い穂波はうねり立つ海面のように次々とその広がりを見せながら、麓の方へ遠ざかって行っていた。

吹く風にも序破急ありぬすき原

隆一

——こんな潜在意識があったから、転た寝の夢の中にまでスキが表れたのであろうが、（薄と白との間に関連はないか?!）と、はたと目が覚めた時、瞼の裏ではまだ穂スキの白い色が揺れていた。

思えばスキほど四季折々の姿を、末黒のスキ（春）、青スキ（夏）、花スキ・尾花（秋）、枯れスキ・枯れ尾花（冬）と、季語にされている植物も珍しい。今は全くといっていいほど忘れ去っているが、農耕民族だった我々の祖先にとっては、スキは身近な、そして生活するうえで必要欠くべからざる植物であったということであろうか。末黒のスキは野焼・山焼の後、焼け焦げた古株から芽吹いた新芽を喜ぶ感覚だし、そこにはその年の豊かな稔りを念ずる思いも含まれて

いたであろう。また青々と生い繁る青ススキには別の喜びがあったから、炎天下でこれを刈り取る苛酷な労働も、さほど苦にならなかったに違いない。なぜなら、ススキの育ちがよいということは、天候が順調で他の作物の成育もよいことを意味していたからである。ススキの花が咲く頃は、麦以外の五穀の取り入れの季節で、当然収穫の喜びがあった。枯れススキに対してはどんな思いを抱いていたか不明だが、寒風に耐え、雪に押しひしがえても耐え忍んでいる姿を見て、春の到来の早からんことを願っていたであろうことは想像に難くない。つまり、ススキは農事の吉凶を占うには格好の植物だったのである。

大阪の漢方医寺島良安が、明の王圻オウキの「三才図会」に倣なまって正徳二年（一七七二）に著

した「和漢三才図会」に、「薄ススキは厚い薄いの薄の字で、草むらの意味を有し、我が国では苳バウ（二芒）の訓よみとしている」と漢文で記していることは先に紹介したが、この訓みがつ頃から行われるようになったかについては、良安は一言も触れていない。夢の中でひらめいた薄と白との間に、何かつながりはないかと手持ちのあらゆる資料を調べてみたが、薄イコール白という明快な答えは得られなかった。ただ角川書店版の「漢和大辞典」に、「味・色・密度・濃度などの程度が少ない。土地がやせている。粗末な。」という説明のところに、類義語として「白」が挙げられていたのが、私には唯一の、一縷の光明であった。（やはり、満更縁がないことはないのだ）とにんまりした途端、「春はあけぼの、

やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる」という「枕草子」の冒頭の一節を思い出した。

暗黒の空が刻一刻変化して行くさまを、清少納言は「春は夜明けに限る。だんだんと白みつつある山際の空が少し明るくなつて、紫がかつた雲が細くたなびいているのがよい」と簡潔に描写しているのを、つい失念していたのは不覚であつた。そして、黒の対義語が白であることも……。

夜が次第に明けてきて、今まで見えなかつたものが、薄れゆく闇の中からぼんやり現れてくるさまを「しらむ」と表現するが、古人は夏の緑一色のススキの原野が、秋、白一色に染め変わる様子を夜明けの現象に見立てて、草むらを表す「薄」の字に、ススキの訓

みを与えたのではないだろうか。それがいつの時代であつたかは定かではないが、「万葉集」と「古今和歌集」との間に一線を画せそうな気が私にはするのである。当時は二字の間に厳然たる区別があつたはずなのである。

それには青ススキと花ススキの形態の相違が微妙に作用しているように思つて、改めて「万葉集」を見ると、ススキの白い穂が風に靡くさまを旗に例えて「旗ススキ」とする説に従えば、このススキには「薄」の字を与えるのが望ましい。「花ススキ」は一例しかないので誤字と断じて除外するが、厄介なのは「ハダ（波太・皮・者田）ススキ」である。なぜハタと読んではいけないのか、古来定説はなく、どの解釈も想像の域を出ていない。されば私も新説を開陳させて頂くと、「ハダスス

キ」は穂にかかる枕詞的な使い方をされている言葉で、主に穂に出る以前の、つまり葉の多いススキ、「葉多ススキ」の状態を指している。但し、「多」には濁音がないので「太」や「田」を当てて「ダ」と読ませたのは、旗薄との混同を避けるためにとられた苦肉の用字だったのであろう。だからこの段階の青ススキを漢字で表すとすれば、「甚だ快利にして、人を傷つくること鋒刃の如し」の「芒」しかない。

「古今和歌集」では旗薄もハダ芒も消えて花薄一色になっているが、これは度重なる遷都の後、ようやく京の地に中央集権国家を確立した平安時代に入って、貴族を中心とする上流社会と、そこに隷属する人々の間に芽生えた美意識に一段と磨きがかかり、作歌のうえ

でも掛詞などに技巧を凝らすようになったのも原因の一つであろう。旗薄やハダ芒よりも花薄の方が、いわゆる華のある歌が作り易かったのかもしれないが、花薄に帰納した最大の原因は、平仮名文字の発明にあったと言えるのではあるまいか。字面からいっても「はな」の方がずっと優しいし、歌のやりとりにしても、口頭で述べるよりは紙に書き認めて贈った方が、訴える力はずっと強かったに違いないからである。

さて、原点に立ち戻って、月見とススキの関係について考えてみたい。現在ではススキはお月見にはなくてはならぬ草と、飾るのが当然といった感じで受けとめられているが、月にススキを供えるという儀式の裏には、それなりの意義があったはずである。「万葉集」

卷八の、「はだすき尾花逆葦き黒木もち造れる室は万代までに」という祝ぎ歌を見ているうちに、ふと、ススキは租（年貢）として徴収されていたのではないかと思いついた。藁屋根やイネ科の植物の総称である萱で葺いた萱葺きの屋根には、厩大な量の藁や萱を必要とする。ちよつとその辺で片手間に刈って来たぐらいでは、到底間に合うものではない。

天武天皇の大宝元年（七〇一）に発効した「大宝律令」では、租は土地の特産品を現物で収めてもよいと定められていたから、例えば武蔵国など荒蕪地の住民は、萱を集めて物納していたのではないだろうか。歌にも「はだすき、尾花」と並列に詠まれているから、屋根の材料になりさえすれば、役所の方でも

あまり固いことは言わなかったのかもしれない。そう考えれば合点がいくのである。だとすれば、他の作物と共に月に供えて感謝の意を表しても一向に不思議はない。ただ、この推理の弱点は、ススキが租の対象物であったという確証がないことである。しかし、宮殿や官衙の屋根を葺くのに要する萱の量を思えば、充分有り得る話だと思ふのであるが……。

月が替わって十月。我が家の庭のススキも、「をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏」の趣を呈している。これはもう「薄」と書かなきゃいけないんだな、そんなことを思いつつ、二度に渡った「ススキ考」の筆を擱く。

（この項おわり）

新年賀謹

浄土宗事務総長 成田有恒 〒154 世田谷区世田谷四―七―九 大吉寺	埼玉工業大学 松川文豪	鎮西学園理事長 鎮西高等学校校長 真和中・高等学校校長 上田祐規 〒802 熊本市九品寺三―一―一 電話(〇九六)三六四―八―一七六	東山学園 学園長 石井俊恭 常任理事 山崎宏賢 西出澄弘
上宮学園 理事長 小林昭五 学園長 小西祐謙 上宮高等学校長 〒543 大阪市天王寺区上之宮町三―一六	上宮太子高等学校長 上宮中学校長 安井良道 〒583 大阪府南河内郡太子町太子	法然上人御降誕地二十五霊場第一番 中国三十三観音特別霊場 誕生寺 〒709 岡山県久米郡久米南町里方八〇八 電話(〇八六七)二八―二二〇二	淑徳高校名誉校長 保元寺住職 里見達人 〒111 東京都台東区橋場二―四―七
教安寺住職 野呂幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六二	大田秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)三三―四〇〇〇	萩市 常念寺 老隠古本超然 〒758 萩市下五間町一七	浄土宗 萃陽院 社会福祉法人 人玉桂会 〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八

謹賀新年

龍泉寺住職 伊東 康雄 〒107 東京都港区南青山二丁目一八—二五	大本山光明寺執事長 西念寺住職 北邨 謙順 〒三三〇—〇 南足柄市沼田三一—五 電話 〇四六五(七四)〇五八八	回向院住職 本多 義敬 〒130 東京都墨田区両国二丁目一八—一〇	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町一一—一
おてらとみなさんの相談所 桜と観音さまのお寺 浄心寺 小池 政雄 〒113 文京区向丘二丁目一七—四	函館称名寺 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八—一四	祐天寺住職 本多 正雄 〒153 目黒区中目黒五—二四—五三	旭蓮社大阿弥陀経寺 山田 智旭 〒590 堺市寺地町東四—一—一四 電話 〇七二二(三三)六—一四〇
清岸寺 住職 原口 徳正 副住職 原口 正弘 〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二—三六—一	松庵寺内無為窟主 小川 金英 〒025 花巻市双葉町六—四 仏教福祉センターによるひる銀行	正覚寺住職 楠美 知行 〒030 青森市本町一—一—一二	大善寺老住 裏辻 賢洲 〒811—32 福岡県宗像郡福岡町松原区 三九一四

謹賀新年

〒111 東京都台東区鳥越二丁一三二一八 北川 一有 長寿院	〒020 盛岡市南大通三一―一四九 圓光寺住職 浄土宗宗議会議員 加藤 順底	〒112 東京都文京区小石川三一四―六 電話〇三三二八―四三七〇一(代表) 伝通院住職 吉川 哲雄	法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井 俊明 〒761 高松市仏生山町甲三二一五
〒606 京都市左京区黒谷町三〇 西住院 戸川 靈俊	〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺住職 野口 善雄	〒606 京都市左京区川端通三条上ル 法林寺門前町三六 檀王法林寺 だん王子供の家 信ヶ原良文	札幌新善光寺 太田 隆賢 住職 太田 眞琴 〒064 札幌市中央区南六条西二丁目
〒440 豊橋市関屋町二二二 宗教法人 悟真寺 代表役員 立松 辨成 電話(〇五三三)五二一五五六六	〒232 横浜市南区庚台六六(久保山) 光明寺 白幡 憲佑	芳泉寺 柳 楽真純 なぎ ら しん じゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	近龍寺住職 松濤 弘道 〒328 栃木市万町二二―四 電話(〇二八二)二二一〇八〇二

謹賀新年

愚鈍院 中村眞道 〒980 仙台市若林区新寺三二二一七 電話(〇二二)二五六六〇五七	晴雲寺 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六一五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒 〒600 京都市下京区寺町通 綾小路下ル中之町五八四一一	九品仏浄真寺 清水順碩 〒158 東京都田谷区奥沢七一四一一三
お骨仏の寺 一心寺 貫首 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区達阪二八八六九 電話(〇六七七)一〇四四四(代)	浄土宗宗議会議員 齊藤价洲 〒110 東京都台東区東上野五一一一六 宗源寺	大松寺 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四一一三八 電話(〇三三)三四五一一二四九四	仏教書専門 山喜房仏書林 〒113 東京都文京区本郷五一二八一四
鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤密雄 〒248 鎌倉市長谷四一一二八 電話(〇四六七)二二一〇七〇三 FAX (〇四六七)三二一五〇五一	大道社 〒102 東京都千代田区飯田橋 一一十一一六	法然上人鑽仰会	法然上人鑽仰会 同人一同

◎ 読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ）
（風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六、十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十八巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成三年十二月二十五日 印刷

平成四年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 南小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三（三三六二）五九四四

〒二二（振替）東京八一八二一八七

謹賀新年

総本山 知恩院 門主 藤井実應	大本山 増上寺 法主 中村康隆	大本山 金戒光明寺 法主 稲岡覚順	大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺 法主 藤堂俊章	大本山 光明寺 法主 藤吉慈海	大本山 善光寺大本願 法主 一条智光
〒170 東京都豊島区西巣鴨三二〇—一 大正大学 電話〇三三三九一八—七三二—代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話〇七五四九一—二四一代表 通信教育部 四九一—〇二三九	大乗淑徳学園理事長 淑徳短期大学学長 長谷川良昭 〒174 東京都板橋区前野町五一—五—二 電話〇三(五三九二) 八八三二	京都文教短期大学 学長大河内良孝 〒611 宇治市横島町八〇